

誰を、もしくは何を救いますか？

- ① 片耳パーティを救命ボートに乗せる。
- ② 階下でドレイルを探し、助けようとする。
- ③ それよりもこのクワトリルの蒸気機関の機械類を回収する。

野外

激しい揺れと傾きのせいで、立っているのも難しい。船は徐々に崩壊していく。諸君のうちひとりドレイルを探して下層を泳ぎ、残りは甲板の救命ボートを目指した。パーティはといえば、棺となった船室にとり残された。

なんとか両方とも見つけ出したが、ドレイルはうつ伏せで水面に浮かんでおり、酷い火傷を負った上に息もしていない。いったん漂流物の上に引き上げ、小型の救命ボートにまで運びこんだ。

ひとは胸部圧迫や人工呼吸を繰り返したが、ドレイルの運命に興味がない他の者は、沈みゆく船から機械類を回収しようと水中に飛び込んだ。

何とかドレイルは息を吹き返し、肺まで呑みこんだ水を弱々しく吐き出した。仲間がいくつかの装置を手に戻ってきたところで、水平線上の島を目指すことになった。第一印象よりは大きな島だった。辿り着いたのは危険な絶壁だが、切り立った崖に洞窟の入口が見えた。

選択 A： ドレイルの看病のためにも、安全な上陸地点を求めて周囲を探し続ける。

選択 B： 危険な洞窟！ そら冒険だ！ ドレイルの容態なんて知るものか。

m2

選択肢: 安全な上陸地点を探す

目的: 全赤根草の略取

序幕:

冒険心にも、おのずと限界がある。心躍る無謀な探検か、諸君を道連れに自爆しようとした狂えるクワトリルの命を救うか？なかに、簡単な損得勘定だろ。救命ボートの中央に横たえられ、震えてズタボロなドレイルの姿を目にしたなら、他に選択の余地はない。

その狂気は、同情に値する怒りと、復讐への誓いによって駆り立てられたものだ。それにドレイルこそが、文明社会へ戻るための唯一の希望ともいえた。

半周して島の北側にまわると、ありがたいことに絶壁が途切れ、砂浜になっていた。早速上陸し、ドレイルを砂浜に横たえた。必死の治療の甲斐もあって容態は安定し、意識を回復した。だが火傷の状態は極めて深刻だ。痛みのせいで、うめき声をあげるのが精いっぱいだ。

「赤根草（あかねそう）……」と、吐き出すよう言った。

確かに、赤根草の軟膏は火傷に効くと聞いた覚えがある。この島でも見つけ出すことはできるだろう。少なくともドレイルは、そう考えている。

そう思案しつつ、海岸から背景の木々の向こうを眺める。どうやらいささか問題があるようだ。一つは島の内奥から聞こえてくる奇妙な音だ……不気味かつ低く一定のリズムで、ときおり不規則に高音の金切り声が混じる。控えめに言っても愉快とは言えなかった。

もう一つの問題は、触れるだけで衰弱を引き起こす強力な毒草・刃根草（はがねそう）だ。外見では、ほとんど赤根草と区別がつかない。

ドレイルが再びうめいた。これでもう腹は決まった。彼女の命を救うため、奇妙な森へと挑むことにする。二つの問題には、すぐ直面することになるだろう。

-  大鎖蛇
-  大地の魔神
-  ヴァームリングの斥候
-  ヴァームリングのシャーマン
-  イバラの茂み (x4)
-  切り株 (x3)
-  トーテムポール (x3)
-  丸太 (x2)
-  樹木 (x3)



使用する地形タイル:

- B1b
- G1a
- H2b
- A4a
- M1b

特別ルール:

数字の書かれた目的トークンをシャッフルし、指示されたヘクスに1つずつ裏向きのまま置きます。2人ゲームなら①~⑧までを **a** に、3人なら①から⑩までを **a** と **b** に、4人なら①~⑫を **a** と **b** と **c** に配置してください。

これらのトークンは通常どおり略取できます。偶数の数字トークンは赤根草です。目的達成には、2人ゲームなら4つ、3人なら5つ、4人なら6つの赤根草が必要です。奇数の数字トークンは刃根草で、略取したら即座に2ダメージと毒  を受けます。



鬱蒼と生い茂る森の奥へと進むほど、あの不気味な旋律はどんどん大きくなっていく。この島に潜む魔神どもと、何らかの関係があるのだろう。おそらくこの音が、影響を及ぼしているのではないか？

ついに、その根源を見出した。邪悪な力に染まったヴァームリングのシャーマンだ。どう見ても善なる所業とは思えなかった。

終幕:

急ぎ砂浜まで取って返した。小柄なクワトリルの体なら、軟膏にしても充分覆うことができる分量の赤根草を抱えて。早速膏薬を作ったが、全身塗布するのに1時間はかかった。ドレイルの容態が、うめき声から穏やかな呼吸へと変わっていく。さらに1時間も経つと、ようやく話ができるようになった。だが会話は、ときおりすすり泣きで中断された。

「ごめんよォ……」とても小さな声。「アタシはただ……ルースのために……でもどうしてアタシなんか助けたりしたのサ？」

そこでドレイルは泣きじゃくり、もう一度冷静さを取り戻すのに、しばしの時間が必要だった。そのあいだずっと、不気味な低音の詠唱は、森の中から響いていた。

「充分な建材さえ揃えてくれたら、船を造って、こんな島からオサラバできる。海上に戻れるんだわサ」クワトリルは断言した。

「後はアンタたちに任せるヨ」穏やかに続けた。「アタシには、もう生きる理由なんて何もないんだから。今までのわがままの償いをする他にはネ」

報酬:

各人チェックマーク✓2つずつ
各人10ゴールドずつ